



2010 年6月10日発行

「赤レンガをいかす会」

赤レンガ通信

この通信は皆様のカンパ金で作成・送付しています。感謝！

NO.2

〒272-0823 千葉県市川市東菅野 5-8-21-201(いちぶんネット内)

TEL047-339-7809 FAX047-339-7810 Eメール akarenga_2010@yahoo.co.jp

「赤レンガをいかす会」に末永いご支援を！

「赤レンガをいかす会」 代表・吉原廣

2010年2月6日(土)、市川市国府台2丁目の旧千葉県血清研究所跡地内にある旧陸軍の赤レンガ建造物を保存しようと開かれたシンポジウムから、4ヶ月が過ぎようとしています。

多くのマスコミやミニコミ誌に掲載されたおかげで、シンポジウムには市内外から200名を越える市民が参加され、「市川市内にこんな宝物が残っていたのか！」という驚きと、「ぜひとも保存に協力したい！」という大きな期待の声が寄せられました。その後、会員も150名を越えました。

シンポジウムの後、3月27日(土)には、跡地を管理する千葉県福祉政策課にお願いして、「これが最後」という約束で、三度目の赤レンガ建造物見学会を実施でき、やはり200名の市民が集まりました。

5月20(木)には、東京都北区中央図書館として再生保存された赤レンガ建造物を見学に行きました。

そしてこの後、6月29日(火)には、市川市議員との懇談会を予定しています。議員の皆さんに赤レンガ保存の意義を訴えるとともに、今後の活動への具体的なご協力やご助言などをいただこうと思います。

また、7月19日(祝)、和洋女子大学で「登録有形文化財に関する学習会」を開催する予定です。赤レンガを残す一つの手段として、登録有形文化財の指定を受ける形がありますが、その有効性と現実性を学習しようという開催目的です。



現在、旧血清研究所は堅く門が閉ざされていて、内部を伺い知ることはできません。県ではこれから敷地内の土壤汚染調査に入ります。どのような結果になるか不安半ばの結果待ちです。

さて「赤レンガをいかす会」では、最初から「形だけの保存ではなく、その再生・有効保存に向けた活動」をしていこうと確認していますが、経過の中で、「赤レンガばかりでなく、旧血清研究所の施設そのものも再生・有効利用できないか？」という議論が起こっています。そうした視点に立って、この会の活動は今後どのように推移していくでしょうか？

まず、跡地を管理する千葉県と譲渡を希望している市川市との協議を深めていかねばなりません。行政サイドでは跡地利用の具体的なプランが固まっているわけではありません。市民側からは、赤レンガの保存を訴えるだけでなく、跡地全体を「このような施設にしていこうではないか」という具体的なグランドプランを提起していくことが必要でしょう。平和・文化芸術・環境・福祉といった視点から、これからの市民社会のあり方の本質を問う「どうしても必要な施設」という説得的なグランドプランを提起していきたいものです。

資金の問題もあります。県でも市でも緊縮財政の折、すべてを行政におんぶに抱っこでは事は運ばないのは当然です。改修改築・運営に至るまで、行政と市民の協働基金といった市民主義的な新しい発想が必要でしょう。

そして最も大事なことは、「赤レンガを保存したい」という単純な発想から、「市民の活力を醸成していく施設建設」へとつなげていく大きな夢を描く、そして実現へと知恵と努力を注ぎ込んでいく市民の粘り強い活動、そうした活動を面白がる楽天性ではないかと思います。「私たちの町は私たちで創っていく。私たちの人生は私たちで彩っていく」という、本当の意味での市民主義の壮大な実験場となるのではないかと期待するのです。

「赤レンガをいかす会」では、今後も市民のさまざまな英知を結集させながら、実現に向けた具体的なプランと行動を提起していくつもりです。皆様の末永いご支援をお願いします。

北区中央図書館の旧陸軍赤レンガ施設を見学しました！

北区立中央図書館(赤レンガ図書館)と、東京家政大学赤レンガ校舎 5月20日(木) 13時~17時

JR 十条駅から赤レンガの塀の残る陸上自衛隊駐屯地を通り抜けると、美しい緑の中央公園の中に北区立中央図書館「赤レンガ図書館」があります。1905(明治 38)年、旧陸軍東京砲兵工廠銃包製造所が小石川から移転【北区立中央図書館外観】レンガ施設群【中央図書館カフェ】図書館は大正【東京家政大学】部分保存したものです。休むに至るまで、旧陸軍駐屯地を接収しに不甲駐留地の解放運動、この後、この施設保存を求める市民運動があり、北区が「近代遺産の保存は時代の流れ」として更地移譲ではなく、建物付で割譲したものです。保存したレンガ棟部分にカフェをもつユニークな図書館です。

市民に支えられ、行政がその意義を見出しやる気になれば、保存・活用することができるということを確認することができ、また多いに参考になるよい機会になりました。

次に、隣の板橋区の東京家政大学が東京第二陸軍造兵廠時の 3 棟の赤レンガ建物を保全・活用し、北区登録有形文化財となっていることを知り、見学させて頂きました。21 号棟は生活科学研究所、22 号棟は造形表現基礎実習室として利用され、他に 58 号棟があります。

大学が旧陸軍敷地・施設を利用している事例は全国に少なくないと思われますが、東京家政大学として保存・活用されてこられたことに、敬意を表する思いでした。

★ 中央図書館の松本氏、黒川氏、飛鳥山博物館の山口氏、及び東京家政大学管財課から、丁寧にご説明を頂き、併せて貴重な資料を頂きました。紙面を借りてお礼を申し上げます。

今回、私は「赤レンガをいかす会」の北区立中央図書館と東京家政大学の見学会に参加させていただきました。

北区立中央図書館では、担当の方が丁寧にわかりやすく説明をしてくださいました。説明を受けてから、実際の赤レンガ倉庫を見てみると、とてもきれいに修復され、90年以上前に作られたものとは思えないほど、見事に近代的な図書館と融合しながら、素晴らしい存在感を放っていました。

東京家政大学では、3棟のレンガの建物が残っていました。その中でも特に、58号棟は他の2棟と比べレンガの色が鮮やかでデザインも凝っていて、とても素敵でした。

今回の見学で、レンガの建物は(どんなに)古くなっても、丁寧に手を加えれば、美しく素晴らしい建物に生まれ変わることがわかったので、これからも、歴史あるレンガの建物を大切に残し、蘇らせていってほしいと思いました。

和洋女子大学家政学部生活環境学科 4 年 加瀬 由季



【北区立中央図書館外観】



【中央図書館カフェ】



【東京家政大学】

「赤レンガをいかす会」の見学ツアー(5/20)に参加して

高野邦夫・運営委員

二月六日(土)に発足した「いかす会」の最初の行事が、歴史の中でつくられ、現在も残され活用されている他地域の赤レンガ建物を実際をみんなで見てみよう(この眼で確かめ学ぼう)というものであった。“百聞は一見に如かず”——ここ十数年来、海外を含めて戦争遺跡(遺物)と戦争博物館めぐりを続けているが、今回も得難い機会として参加した。

当日は小雨がちの湿気の多い日であったが、北区赤レンガ図書館(通称)での丁寧なオリエンテーションのあと、当図書館と東京家政大学内の三つの赤レンガ棟を約三時間近く見て歩いた。北区中央図書館では保存も考え乍ら当時の赤レンガ建物の一部を巧みに取り込んで図書館がつくられていることに感心した。また、東京家政大の三つの赤レンガ棟(21、22、58号棟)は、敗戦当時の有様とはかなり変容していると思われたが、それでも当時は陸軍の火薬製造所の一大拠点として赤レンガの建物が林立していた様子がキャンパスを歩き回るなかで想像できた。

歩き回るなかで考えたことは、軍事史研究の“はしくれ”に連なる者として明治維新から77年間、戦前日本が繰り返した過去の戦争とのかかわりのことであった。市川の国府台地区がかつての巨大な軍用地から文教・文化地区に日本国憲法のもとで生まれ変わったように、これらの地域も建物も戦争に欠くことのできない重要な役割と位置を占めた所であった。詳細は省略せざるを得ないが、北区の赤レンガ建物は一九〇五年(明治38年)に設立された「東京砲兵工廠銃包製造所」が前身である。その後、拡張に拡張を重ね敷地は約十萬坪に達したという。ここで戦争(簡単にいえば“人殺し”だ)に不可欠な小銃弾と信管が何千万発も何億発も製造されたのである。東京では主として銃弾をふくめ小銃や機関銃などの軽火器をつくり、大阪砲兵工廠では主として火砲などの重火器をつくった。靖国神社の青銅製の巨大な第二鳥居は大阪でつくられ、海路、靖国神社まで運ばれてきたものである。

東京家政大内の赤レンガ建物の前身は板橋火薬製造所である(最盛時には年間一万トンを超えた)。ここには最盛時60棟近い建物が、場所によっては万が一の事故に備えて高い土塁に囲まれて立ち並んでいた。弾丸も砲弾も火薬も戦争には欠かせない。近代日本の重工業・化学工業は、文字通り戦争と一体不可分のものとして成立・発展してきたものである。

先日、別の団体の企画で足尾銅山跡を見学した。足尾銅山は近代日本の公害(問題)の原点として著名であるが、その跡を訪ねてやはり戦争とのかかわりを想起した。この銅山の拡張・発展もまた、日清・日露戦争を含めて日本の戦争と一体のものだった。日露戦争の勝因の一つに下瀬火薬の発明があり、また余りの大量消耗のために砲弾が不足し、外国に発注したことも有名なエピソードである。小銃弾にも砲弾にも銅は欠かせない。足尾では江戸時代から銅の製錬と製造が始まっているが、古河財閥の成立と共に飛躍的に発展するのは戦争の“おかげ”であった。

いま私たちはかつての戦争の一大拠点であったものの残骸や残跡を見ているわけだが、同じ建物が何のためにつくられ、どういう役目を果たしたのか(果たさせられたのか)、鋭い想像力をはたらかせる必要はないだろうか。歴史に学ぶとはそういうことではないだろうか。最後に、かつての軍事基地や軍事上の拠点はほとんど敗戦後に米占領軍によって接收され(活用され)、用済みのものは返還されたが、現在では各々米軍基地や自衛隊基地あるいは施設として活用されていることを付言しておきたい。

絵図は語る赤レンガの建設時期は…明治34年より前か？

高木彬夫・運営委員

私たちが保存活用したいと願っている「赤レンガ」はこれまで「明治37年築の建築」が定説であった。理由は血清研30年史に書かれた記事が根拠だと考えられる。血清研が国府台に開所した時に「赤レンガ」の中から見つかった木札に拠って明治37年築とされたのだが、実は30年史の筆者が日付を勘違いしたらしい。

平成21年千葉県に保管されていた当の木札を確かめ、起工 明治36年3月6日 竣成 全 36年3月31日と記されてある事がわかった。この木札は棟札とも形式が異なる事、発見された状況等にはっきりしない点もあるが他に裏付ける資料がないので「赤レンガ」は明治37年(36年)築と言う事になっていた。

本会設立シンポの時、参加者の方から『明治時代に東京湾沿岸に作られたレンガ造の軍の施設について言える事は、明治 30 年以前のものにはフランス積みを採用している事が多く、以後はイギリス積みが多い。「赤レンガ」がフランス積みならば、もう少し早い時期のものではないか』という別の視点からのご指摘を頂いた。以上の様な経緯で、まだ確な建設時期が特定されているわけではない。

加えて最近、新しい事実がわかった。

ここに一枚の図版「野戦砲兵第一連隊及び第十六連隊之図」がある。敷地内の建物配置を銅版画で表したもので、縮尺等は適宜だが建物の大きさと位置関係の概略は理解できる。建物には名称が夫々に書き込まれているので隊の組織と建物の関係も判る。旧総寧寺参道沿いの木立の中に配置されている建物に「第十六連隊武器庫」という小さい建物がある。位置はほぼ「赤レンガ」と重なる。もしこれ等が同一のものであることを認めれば(私には 95% そう思える)、図版は武揚堂・明治 34 年 10 月 21 日発行と記されているので「赤レンガ」はそれ以前に建築されたものと推定しても良いだろう。

教導団の兵営は明治 18 年 3 月に着工され、工事途中の 5 月には先ず歩兵大隊が移転して来る、続いて教導団病院(教導団廃止後は国府台衛戍病院)が 5 月末に発足した。翌 19 年には兵営が相次いで完成、砲兵大隊、工兵中隊、騎兵中隊、教導団本部の順で 9 月末には全ての隊の移転が完了した。この時期に「赤レンガ」が建築されたと考えることはごく自然であろう。教導団は明治 32 年末に廃止される迄の 15 年間に約 20,000 人の下士官の育成をこの地で行った。明治 32 年 11 月 4 日に教導団廃止式が行われ、11 月 24 日には野砲兵第十六連隊が創設された。僅か 20 日の間に下士官養成機関から実戦部隊への転換が行われた。組織は変わったが、人員、装備などが慌ただしい日程の中で大幅に変わったとは考え難い。教導団の兵営の大部分は、そのまま第十六連隊に引き継がれたと考えるのが自然であろう。

これらの事を勘案してもまだ確定できない。「赤レンガ」が明治 18~19 年の教導団の建築なのか、明治 19 年から 32 年の間に増築されたものか或いは明治 33 年に「第十六連隊武器庫」として新築されたのか、明治 36 年なのか、さらなる検証が重要になってきた。「赤レンガ」の詳細な建物調査が待たれるところである。

この図版の他に「野戦砲兵第十七連隊兵営之図」明治 35 年 10 月 30 日発行があるが「赤レンガ倉庫」の建築時期について直接関係はないので今回は省略する。

参考資料：『市川市史第 3 巻』、『血清研究所 30 年史抄』、田中由紀子『軍都から学術文化都市へ(略)』

お知らせ

1

市川市議会議員との懇談会！

2010 年 6 月 29 日(火) 14:00~16:00 市川市中央公民館 2 階 第2、第3 会議室

参加ご希望の方はご一報ください

懇談内容

- ①活動の現状報告
- ②保存・再生・活用に向けた活動基本プランに関する意見交換

お知らせ

2

学習会 1 「登録有形文化財指定の可能性を学ぶ」

2010 年 7 月 19 日(祝) 13:30~16:00

和洋女子大学南館8階 大会議室 (参加費カンパ制)

- 講演1 荻谷勇雅氏 小山高専校長(元文化庁)
「近代建築遺産の重文指定と国府台赤レンガの可能性と課題(仮)」
- 講演2 藤谷陽悦氏 日本大学(近代建築史)教授
「千葉県(関東)における近代建築遺産の状況について」

プレ学習会 12:30~13:00

田中由紀子、修士論文「市川国府台一軍都から学術文化都市への生活空間の変容」の報告